we support↓ RQ 災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒潮を送ろう！大作戦しんぶん」改め

復興支援かわらばん『すけさきた』しんぶん

「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である

MARCH 11 2023

『田植踊』地域再生へ誓い　浪江・請戸、津波被害の神社で奉納

（2023年2月20日　福島民友新聞　みんゆうネット）

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた浪江町請戸の苕野（くさの）神社で19日、豊漁などを祈願する「安波祭（あんばまつり）」が行われた。請戸芸能保存会が優美な「請戸の田植踊（たうえおどり）」を奉納し、集まった町民と共に今後の地域再生を誓った。

安波祭は江戸時代から続く伝統行事で、震災と原発事故の影響で一時場所を変えて実施していたが、**同町の帰還困難区域を除く地区の避難指示解除を受け、2018年から同神社で復活した。ただ、津波で本殿が流失したため、仮の社の前で神事などを行ってきた。**

現在、仮の社の近くには新たな本殿の整備が進む。氏子総代長の五十嵐光雄さんは「来年の祭りは新たな社殿でできる」と語る。**将来的には、震災前に行われていた樽神輿（たるみこし）の復活も目指していく**という。

▲2024 年には隣の場所に新たな社殿が再建されるため、元の社殿跡での奉納は今年が最後となる　（画像は 4 点ともテレビュー福島 WEB 記事より）

▲練習を始めた詩乃ちゃん（左）と姉・寿奈ちゃん（2022 年 7 月）

▲2021、22 年はコロナ禍で神事のみが執り行われたため、田植踊の奉納は3年ぶりとなった

（2023年2月22日　テレビュー福島）

震災の津波で大きな被害を受けた福島県浪江町の請戸地区で、19日、伝統の安波祭が開かれました。

3年ぶりに奉納された田植踊には、6歳の女の子が初めて踊り手として参加しました。

浪江町請戸地区で開かれた「安波祭」は、海の安全や豊漁、豊作を願って300年以上前から続くとされています。

祭りのメイン行事のひとつが、地元の子どもたちが奉納する「田植踊」です。

鈴木詩乃ちゃん「ちょっと緊張しています。きれいに踊りたいです」

南相馬市の鈴木詩乃（しの）ちゃん、6歳。今回初めて踊り手として参加しました。

詩乃ちゃんは父親が請戸の出身で、4年前には、詩乃ちゃんの姉・寿奈（じゅな）ちゃんが踊り手になりました。

そのとき、詩乃ちゃんはまだ2歳でしたが・・・。

田植踊を指導している佐々木繁子さん「詩乃ちゃんも踊ってくれるのではないかな」

震災後、請戸の子どもたちは県内外に避難していて、踊り手を集めるのは年々難しくなっているのです。

佐々木繁子さん「最初5人から始まって、アタックしながら踊り手を集めている」

そんな佐々木さんの期待に応えるかのように、去年の夏、詩乃ちゃんは田植踊の練習を始めました。

そして、2月19日。ついに詩乃ちゃん、初めての奉納です。

豊作を願う「田植踊」。

詩乃ちゃんは、稲の苗を植える赤い着物の「早乙女」を務めます。

震災前から田植踊の指導にあたってきた佐々木繁子さん ▶

姉の寿奈ちゃんと一緒に堂々と踊り、3年ぶりの奉納が無事に終わりました。

鈴木詩乃ちゃん「緊張したけど上手に踊れました。いつも間違っているところを直せたのが上手だったと思います」

佐々木繁子さん「この場所で奉納できたのが感慨深いものがあるんだよね。まだまだ頑張らなきゃってなるよね」

若い踊り手の力を得て、伝統が受け継がれていきます。　（池田裕美子）

東日本大震災から12年が経過しました。被害に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げるとともに、被災地の一日も早い復興と、これからの日々の平穏をお祈りいたします。

令和5年3月11日　西表島エコツーリズム協会

資料：福島民友新聞　みんゆうネット、テレビュー福島、朝日新聞デジタル、福島中央テレビ

文責：井上文子（西表島エコツーリズム協会　東北復興支援担当）